

日本仏教に於ける

戒律の研究

石田瑞磨著

日本仏教には戒律軽視の傾向があり、研究面にもそれがあらわれていたが、著者は戒律を正しく捉える必要を認め、その全史を通して戒律の實際を明らかにしようとして、この著作には、日本仏教伝来以後、鎌倉仏教までを扱っている。尤も親鸞・道元・日蓮については稿を改めるべきものとして、ここには扱わない。

まず日本仏教の戒律は、鑑真のもたらした南都戒と、最澄によって始められた天台菩薩戒の伝統の二大潮流があるが、それらについて歴史的展開の跡づけを背景に、その實際を明らかにしようとしてゐる。

鑑真の戒律は、かって指摘されたような瑜伽戒とするのは無理で、鑑真は四分律宗を受けた戒律の明匠であり、同時に天台の学匠であったことを注目すべき

で、それは鑑真の戒律を解く鍵でもあり、又、梵網経への関心もうかがわれるという。

最澄の円頓戒提唱は、歴史的諸契機を媒介としなされたものであり、南都との諸論争の根幹も戒律にある。又、最澄の円戒は智顛の円戒が法華円教の実相觀に立ち、箇々の戒相を包括し、それを超えるものであるに比し、法華開會を許さぬ梵網戒中心で、小戒を否定する。天台宗学でいう「正依法華傍依梵網」とは最澄の真意に遠くと論じてゐる。

次に最澄以後、光定・円仁・円珍・安然の円戒思想、法然の戒律觀、鎌倉期の円戒、南都戒の再興、律宗復興について、以上詳細に述べた勞作である。

(百七)

A 5 版 559頁 昭和38年3月発行

Christianity and the Encounter
of the World Religions

by Paul Tillich

(Columbia University Press
New York and London 1963)

本書は、Columbia 大学で一九六一年の秋に四回にわたって行われた The Bampton Lectures の講義録を後に著者自身が手を加え、それを出版したものである。したがって四章に分けられ、それぞれの章に次のような内容を示す表題が付されてゐる。

1. A View of the Present Situation: Religions, Quasi-Religions, and Their Encounters.
2. Christian Principles of Judging Non-Christian Religion.
3. A Christian-Buddhist Conversation.
4. Christianity Judging Itself in the Light of Its Encounter with the World Religions.

著者の序文に述べられているように、この書を中心とする主題は、一つの重要な問題の提起を試みたものである。それは文化現象の根底に横たわる宗教的なものの相互の出会い (encounter) に起つてゐる状況に、如何に対処すべきかと問ふことである。勿論その宗教的なものは、著者の持論である究極的関心事 (ultimate concern) によつて捉えられた存在の状

態である。それ故に国家、科学、組織、階級等がその関心の対象であるのが、quasi(擬似的)-religionである。それについて特に著者は facism と communism に注目している。それらの宗教と、又本来の意味の宗教をも合わせて、それらの相互が出合う現代の状況を論じ(第一章)そこで、宗教自身の審判 (Judgment) の内容が、キリスト教を中心に種々なる角度から論じられている。その根幹をなす考え方は、いかなる宗教的集団も自己の基盤となる主張を持ち、それらの相互にお互い reject か accept かの弁証法的結合 (dialectical union) があるということであり、それについてキリスト教と他の宗教(第二章)、及びキリスト教自身の内部での批(判第四章)、という観点からの神学上の問題を歴史的に述べている。とりわけ仏教を、本来の宗教との出会いの代表的な例に選び、体系的な相互の対話の手がかりに両者の典型的な基盤としての主張を “Nirvana” と “Kingdom of God” に取り、その共通的な面と反撥し合う面の両極的な性質からそれぞれを論じている(第三章)。その章の最後に

“History” に対する両者の理念として、著者はキリスト教は “participation” において仏教は “identity” においてその根本的相違を見ることができると述べている。そしてキリスト教にはそこから仏教では見れない改革的性格が出てくるので、quasi-religion との encounter では如何にそれを克服し得る性質があるかを指適しているのは注目されよう。全体的に著者特有の明快な論旨と文章で論述し、方法的にも比較宗教学に新しい問題を示唆している。(古賀)

原始仏教教団の研究

佐藤密雄著

本書は原始仏教教団の組織運営や比丘の服務行事など、従来あまり研究されていなかった分野を、巴利文律蔵を解説することによって見事に解明した力作である。中国や日本の古来の律学では北伝の漢訳諸部律蔵が中心であったため、前半に説かれている比丘戒を解釈する部分はかなり解明されたが、後半の教団の組織

運営などに関するものは、漢訳文自体にもやや混乱があつて、あまり研究が進まなかったようである。ところがこの難解な部分が巴利文を参照することによって明瞭になり、ここに原始仏教教団の全貌が明らかになったといつてよい。

また筆者は比丘戒以前に出家戒があつたことを極力強調している。なぜなら、仏陀の初転法輪と同時に僧伽が成立したが、そのときには比丘戒はなかった。その後、比丘の中に出家として不応な行為をなすものがあつて比丘戒が作られたのであるから、その行為を不応な行為と判断するには、比丘戒以前に出家戒があつたはずである。その出家戒が如何なるものか、というのが本書の一つのねらいである。しかして南伝の長部及び北伝の長阿含の戒蘊にある梵網経や沙門果経等十三經の小、中、大の三種の戒は、比丘戒以前の出家戒であつたとしてその出家戒の内容について論じていく。

(舟橋尚)

A5・八七九頁・昭和三八年三月刊
定価三、〇〇〇円・山喜房仏書林